

『三四郎』 富士山と不二山

Junko Higasa 2014.4.19

『虞美人草』での主張を念押しするかのように『三四郎』でも広田先生が富士山に言及する。『富士山に比較する様なものは何もないでしょう』『君、不二山を翻訳してみた事がありますか』『自然を翻訳すると、みんな人間に化けてしまうから面白い。崇高だとか、偉大だとか、雄壮だとか』『みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻訳する事の出来ない輩^{もの}には、自然が毫も人格上の感化を与えていない』

富士山は古文献で「不二山」とも書かれた。併せて漱石の骨董趣味に着目すると、浮上するのは本阿弥光悦の白楽茶碗「不二山」である。その下半分が焦げて上部が白い様子が富士山に似ていることから名付けられたそうだが、窯の温度等による釉薬の焦げは自然のものか作者の意図かという論がある。この箇所は漱石のちょっとした目利き自慢のようだが、転じて以下のように翻訳してみると面白い。

頭に白い西洋文明を頂いてくすんだ日本古来の精神。『こんな顔をして、こんなに弱っては、いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですね』『日本の誇れるものは天然自然が拵えた富士山しかない』という広田先生の言葉の裏には「西洋に追いつくためには日本古来の精神を捨ててもよい」という意図的「自然の人格化翻訳」社会への嘆きがある。東洋的美徳を言い表せない者には、その良さが毫も感化を与えない。いずれ日本経済は『亡びるね』